

<藤沢市肢体不自由児者父母の会機関紙「飛鳥」第265号から抜粋しています>

令和6年能登半島地震について（続報）能登半島地震から40日

石川県肢体不自由児者父母の会連合会 会長 （個人名は控えさせていただきます）

全肢連情報より

令和6年1月1日の能登半島地震による災害に際し、全国の皆様より心温まるお気遣いをいただき、被災をされた人々とともに心からお礼を申し上げます。また、各地から警察官・自衛隊・医療支援・災害支援チーム・介護職員・ボランティアなどの派遣を頂き、被災地の復旧・被災者支援にご尽力いただいていること、本当にありがとうございます。命を救う救助があれば、命を吹き込む言葉もあると言います。激励・ボランティア・義援金等々、様々な支援の形がありますが、能登復興を願う思いは共通です。皆様からの思いを受け止め報いるために前を向いて進んでいけると信じています。今回のマグニチュード7.6の地震は過去100年間、日本の活断層地震で最大といわれています。能登半島の北側では、海岸線が90キロにわたって変化をしました。地球創生からの数十億年で考えればちっぽけな出来事なのかもしれませんが、なぜこの地でこの日なのか、正月や旧盆、年に一度の故郷の祭りの日には若者やその家族が皆で帰省して過疎の町が一番にぎわう日でもあります。迎える親たちは指折り数えながらご馳走を用意して待ちます。あの日、能登に住むお年寄り、帰省した子どもの家族が、家屋の倒壊や土砂崩れで一瞬にして尊い命を奪われました。十日を過ぎたころから金沢市などで、祭壇にいくつもの遺影が並ぶお葬式に参列しました。孫たちのイベントで声をかけてもらった優しそうなお母さんと素敵な兄弟姉妹、友人と伺った家のご家族、どちらも唯一父親だけが残り悲しみに暮れることとなりました。この能登半島地震では2月10日現在石川県内で、災害関連死15人を含む死者が241人、土砂崩れ現場から未だに見つからない御夫婦や、200棟以上を焼失した輪島市朝市通り付近に住み行方不明の人など安否のわからない人が11人。負傷者数1182人。全壊・半壊などの住宅損傷戸数が60000個以上と発表されています。住宅損傷戸数は、今も毎日増加しています。現在も余震が続く中、何とか建っているものの、危険判定の赤紙が貼られた自宅がいつ倒壊するのかという恐怖の中、夜も眠れぬ日々が続いていると聞きます。今回もそんな被災者からの声、そして医療的ケアなどが必要な重い障害があるお子様がいるご家族の地震当日の様子や困ったことなどをお聞きしましたので、以下に紹介します。

- ・自宅が倒壊して住めないなので地域の集会所で避難生活をしている。みんなこの先どうなるのか不安で気持ちも暗くなるのだが、率先してお世話をしてくださる介護施設職員の女性の明るさに皆さん元気をもらっていた。先日夜中に外の仮設トイレに向かったらその女性が泣いていた。みんなが被災者だ。
- ・何もかも失くして今は何も考えられず呆然としている。先が見えなくてももう笑うしかない。
- ・地元に残りたいが、自宅も工場もつぶれて仕事ができない。働かないと生活できない。
- ・実家に行った帰りのショッピングセンターで地震に遭遇した。初売りのお店の中は大勢の人がパニックになり大混乱となった。津波警報が出たのでみんな屋上の駐車場に避難したが、寒い中子どもたちは泣き出し、家族で体を寄せ合い寒さをしのいだ。二時間くらい後に警報が解除になり車で帰ったが、道路は大渋滞。普段は30分くらいの自宅まで6時間を要した。
- ・地震後に自宅が停電。断水となった。電気はその日のうちに回復したが、断水は一週間続いた。トイレ、お風呂、洗濯、何もできない。給水所に行って並んだが途中で無くなったとのこと。また並ばないといけないけど、

追加がいつに来るか分からない。確かな情報が欲しい。

- ・父母の会にお世話を頂き、子どもは無事に施設に入所できました。ありがとうございます。私たち親はしばらくネットカフェで生活していましたが、金沢市でアパートが見つかり、みなし仮設住宅に暮らすことができています。
- ・自宅は倒壊したが、敷地内の蔵が何とか残り、改装して暮らしている。井戸水を使うことはできるが、町の下水管が破損しているのでトイレなどまだ流せないのが不便です。自分たちは納屋でも生活できるので本当に必要な人に仮設住宅に入ってもらいたい。
- ・自宅の地盤に液状化が起り、敷地の庭にいくつもの亀裂ができた。当初、建物は大丈夫かと思っていたが、徐々に違和感を感じていると今はゴルフボールが勢いよく転がるくらい傾いてしまった。
- ・もともと避難はそう簡単にはできないだろうと思って水や食料などの備蓄はしていたつもりでしたが、全然足りてなかったと反省しました。娘の唯一の食料が食事療法用の特殊ミルクで、薬局などには売っていないので、物流が止まると大変です。薬は当面必要な分は備蓄してありますが、てんかん治療などの薬の量を調整している時期は余分にお薬を貰って備蓄することが難しく、新しい薬は発売後一年間は最大3週間分までしか処方できないというルールなので新薬を試していたときは災害が起こったらどうしようかと思っていました。本人は地震では全く動じていませんでした。揺れる遊びが好きだからかなあと妙に納得。むしろ緊急地震警報の音で大人の方がびっくりしているのですが、きっとあの音でパニックになってしまう子どもたくさんいるのだろうと思います。
- ・私の地域は、震度5強でした。恐怖で身体が固まってしまい全く動けませんでした。家はバリアフリーになっておらず段差も多いので今回の地震でスロープなどのバリアフリーを考えたいと思いました。睡眠障害のある子なので、いつもと違う雰囲気興奮して夜も全く眠れませんでした。睡眠薬は使っていなかったのですが、災害時に睡眠薬を常備できないかを医師に相談しようと思います。そんな事情もあり避難所で暮らすのは無理だと感じました。てんかん薬を使っていますが分量が増えた時に2週間分の余った薬を災害時に保管しておいたので助かりました。娘は周りの大人たちのただならぬ雰囲気に怖がっていましたし、私たちも平常心を保てませんでした。
- ・地震の時に震源に近い実家にいました。一回目の警報が鳴り直ぐ地震が起きてから二回目の地震が来るまで数十秒くらいでその短い時間で家から脱出することは難しく家の中にいました。地震の時は大人でも立っていることもままならず何かにつかまっているのがやっとなで手を放したらどこかにぶつかるくらいすごい揺れでした。家の軋み音と地響きがすごい音で、私は子どもの頭を守るだけで精一杯で、何もすることもできませんでした。地震が収まった後すぐにスマホも持たず裸足で子どもを抱えて外に出ました。玄関ドアも外れていました。幸い夫も一緒に帰っていて障害のあるお兄ちゃんを連れ出すことができました。両親もいますが年老いて、病気もあり20キロある孫をそう簡単に抱っこできないので、夫がいて助かりました。家が崩れずに立っていたので逃げることができましたが、家が潰れていてもおかしくない状況だったなと思いました。近くの福祉避難所は把握していませんでした。今回たとえ能登に残ることになっていたとしても避難所に行く選択肢はありません。車中泊を選んでいたと思います。
- ・娘は地震の時に放心状態になっていました。持ち出し用の防災リュックを用意していなかったのが娘の学校用の防災リュックが役に立ちました。能登の親戚にバギーに乗っている全介助が必要な男の子がいます。成人していますが暫くは車中で過ごしたそうです。まだ水が出ないので自衛隊のお風呂を利用しているとのことですが、介助してもらいながら一番風呂に入れてもらっているとのことでした。ありがたいです。生活水は山へ水

を汲みに行ったりしているそうです。うちは医療ケアが必要な娘も犬もいるので避難所へ行くのは難しく感じます。車で過ごせるように用意をしておきたいと思いました。

- ・災害時の準備はしてありましたが、実際に起こるとヒヤッとすることが多かったです。慌てすぎてブランケットと一緒に子どもを車に乗せた後で防寒着が無いことに焦りました。子どものケア用品などの荷物が多すぎて大変でした。津波が心配で高台に避難した際、車中に4時間も待機していましたが、車で過ごすことの難しさを痛感しました。子どもはずっと泣き叫び、体位を変えてあげることも難しく、荷物も多くて排泄スペースも大変でした。吸引器の充電も思った以上に早く無くなり電気が止まった災害時には心配です。
- ・電気温水器のタンクが破損したため、たまっていたお湯が流れ出しました。近所の方に温水器へ給水する水道管の元栓だけ止めてもらいキッチンとトイレはそのまま使用できました。お湯を沸かせたので食事の注入は問題なく普段通りできていましたが困ったのはお風呂で、娘以外の家族は実家にお風呂を借りにいけましたが、他の家で娘をお風呂に入れることはできず、正月休みでデイサービスにも行けず、レンジで蒸しタオルを作って清拭しました。給湯器が使えないと適温のお湯を大量に作ることも難しく、髪は洗ってあげられませんでした。陰部洗浄には朝注入用に沸かしたお湯を魔法瓶に入れておき、夕方ぬるくなってきたころにそのお湯を使いました。
- ・子どもたちは金沢市の夫の実家にいて被災はしませんでした。薬が足りなくなりどうしようかと思いました。お正月休みで子どもを見る手は多くありましたが、この地震が平日に起こっていたらどうなっていたかと怖いのです。地震後にかかりつけの病院の院長先生とお話しした際に肢体不自由の被災児は受け入れましたと話していましたが、こんな情報がいつ、どう伝わったかはわかりません。またこども医療センターだけでは到底病床は足りないかと思うので、医療ケアが必要な子どもたちがどこの病院で何人受け入れられるか分ると良いですね。私は病院の血液透析の部門で働いていますが、この治療を受けている患者さんは数日治療しないと死に至ります。そのため、災害ネットワークが他の疾患の方たちとは異なり、どの施設が被災したか、患者が何人いて、どれだけ受け入れてほしいとか、早々に動いて、地震発生数日ですべての患者の対応ができました。死に直結するから優先順位が高いのでしょうか、医療ケア・肢体不自由児もこのくらい整えられるネットワークがあってほしいと痛感しました。
- ・息子は発達障害があるので音や振動に過敏になっています。自宅は三階で思ったより大きく揺れ県立中央病院や県庁にも近いことからサイレンやヘリコプターの音がすごくて、特に自衛隊のヘリの音は聞いたことが無い音で息子は布団をかぶっていました。今は車の移動中に地面の段差などで揺れると泣き叫んでいます。以前の状態に戻るには時間がかかりそうです。
- ・主人が能登町出身なので能登町にいる家族が被災しました。私たちは白山市の自宅に在宅避難しています。実家の安否確認以降、お義母さんから「少しでも気持ちが落ち着いたから」と電話を掛けてくれたのが2週間たってからでした。もし元日に能登に行っていたらと思うと想像するのも怖くてみんなその話はあまりしないままです。在宅避難者には支援物資や炊き出しの情報は届きにくく避難所にも行ったことが無いと話していました。避難所にある物資も自分たちは貰ってはいけないと感じているようで、買い物も制限され生鮮食品が売られていないので食べるものは干物ばかりと聞いています。炊き出しは同じ所ばかりで行われることが多く、同じ人ばかりが恩恵を受けている気がする話をしていました。
- ・金沢市では町会単位で避難訓練の一つで要支援者を把握しており、その要支援者に対する救助者も決めてあります。以前班長をしていた際に、避難訓練の前に庁内地図を広げて、皆で要支援者の家にマーカーをして確認しました。うちは隣のママさんが救助者の役割をしてくれています。ただ今回の地震では私の町では避難する

ことが無かったので、その機能が稼働していたかが確認できませんでした。しかし救助してくれる人がいて避難所があっても、そこで対応できる人が決まっておらず、その先が無いと避難生活は難しいです。地域担当の保健士さんとか、地域の医療福祉を強化して、道路が寸断された時などでも、移動せずにその地域で安心して過ごせることができることを願います。

- ・特別支援学校の校長先生とお話した際、「地震の日、学校を避難所として開放したけど、結局誰も来なかった。と仰っていました。学校のお友達からは「車中避難した」「いったん避難所に行ったけど、ここには居られないと思った」などという話を何人も聞いていて、普段から慣れていて確実にバリアフリーな支援学校が開いていると分かっていたら、皆そっちに行けたのではないかと思いました。学校の生徒だけにお知らせすることはできなかったのかもしれないですが、福祉避難所についてこれから考えてほしいと思います。
- ・避難をされた人で薬を持ってきていないと言われている人が多く、薬とおむつは大目に避難グッズに入れておかないといけないと感じました。重度のアレルギーがあり、避難先で食べられるものが無い場合にどうしたらよいか考えていますが、てんかん発作やアレルギーによる呼吸困難等が起きた場合を思うと不安になります。夜中に大声を出したり笑ったり泣いたりして他の方の迷惑になり、地域の避難所での生活は無理なので、自宅か車中泊になりそうです。便などは座薬や浣腸でないと出ないので、車での生活や断水になった時はとても大変で、今回の地震の時もしばらく車の中にいましたがすぐに嫌になり暴れてしまいました。福祉避難所が機能するようお願いしたいです。
- ・福祉避難所というものがあるのですね。家は被災しなかったものの揺れが大きく金沢港も近いことから、揺れてすぐに避難しました。県庁が近いのですが、入り口が車で渋滞していたため、県立中央病院に行きました。ロビーに、偶然帰る途中だった看護師さんがいて、吸引機やベビーカー（バギーの代わり）持ちますよ！と声をかけて下さり、夫が娘を抱いて、私も諸々の荷物をもって4階まで階段を上がりました。声をかけてくださる方がいて娘の必要なものをもって上がることができ、夫がいたおかげで娘も抱いて上がってもらいましたが、私一人の時に地震が起こっていたら避難はあきらめていたと思います。夜は念のため病院に一泊となりましたが、特殊ミルクを治療で使わせていただいているので、病院には備蓄は無く、家に取りに帰りました。様々な日ごろの備えや避難の仕方を考えさせられました。

★★高齢者や障害者、妊婦といった一般的な災害避難所での生活が困難か被災者のために開設される「福祉避難所」。内閣府は2016年のガイドラインで「住民に広く周知を図る」ために自治体に積極的な広報を求めているが、具体的な福祉避難所名を公表するかは自治体の判断に委ねられている。石川県内19市町の内、金沢市と能登町は「受け入れ準備が整う前に避難所に来られると、混乱する恐れがある」として非公表としている。だが障害のある子を持つ親からは「避難が長引くときに移動先の見通しが立たず不安だ」との声も上がっている。また、今回の能登半島地震では能登地区の7市町で「福祉避難所」の開設が想定2割にとどまることが判明した。開設する予定だった福祉施設等が損傷、断水し、施設の職員が被災、避難して人手が不足したのが主な原因。避難生活の長期化に伴う災害関連死も懸念され、宿泊施設などへの二次避難が進む中だが、「災害弱者」への対応が急がれる。